

# セシル・シャープとアパラチア民謡

桜井雅人

## 1. アパラチアへ出掛ける

1916年7月23日のこと、50歳代後半のイギリス人男性が、神経炎や痛風や喘息などいくつかの持病を抱えながらも、ニューヨークから列車に乗って待ち兼ねたように南部へ旅立った。助手として再度イギリスから呼び寄せたばかりの30歳前後の女性が同行して、16日に起きた大洪水のため足止めと回り道で48時間の長旅のあと、ようやくノース・カロライナ州アッシュヴィル (Asheville) に到着、同地のジョンとオリヴ・デイムのキャンベル夫妻 (John and Olive Dame Campbell) の出迎えを受ける。それから2人は約2カ月の間、ノース・カロライナ州を中心に、テネシー州とヴァージニア州にも出掛けていき、南アパラチア山地で民謡採集旅行をおこなったのである<sup>(1)</sup>。旅は初めから困難が予想されていた。現地の鉄道はあちこちで不通、道路は寸断されていた。馬車を乗り継ぎ、山道を歩き、丸木橋を渡り、河床を通過して、ようやく当初の目的を達して、仕事の予定のあったシカゴに戻ったのは9月末のことであった<sup>(2)</sup>。

これがセシル・シャープ (Cecil J. Sharp, 1859-1924) とモード・カーペリーズ (Maud Karpeles, 1885-1976) にとってアパラチア民謡との初めての直接の出会いである。採集旅行はこれで終わらずに、1916年の末から翌年の2月までイングランドに一時帰国したあと、再びアメリカに戻り、1917年4月から10月まで、および1918年4月から10月までさらに2度にわたってアパラチアに出掛けることになる。その期間を合計すると12カ月に及び、その間実際の採集には46週間を費やした。南アパラチア山地のかなり広い地域を回り、ノース・カロライナ、ヴァージニア、ケンタッキーにはそれぞれ3カ月半ほど、テネシーに1カ月、ウェスト・ヴァージニアには数日間滞在して、主に小さな町村やセツルメント (「隣保館」なる訳語もある) を訪問して

その数は70~80に及んだ。成果としては、281名の歌い手から、約500の歌 (songs and ballads), 異版 (variants) を含むと合計で1612の旋律 (tunes) を記録した<sup>(3)</sup>。シャープは生涯で5000近くの旋律を集め、そのうち約3分の1がアパラチアからであること<sup>(4)</sup>を考えると、これは経験を積んだ彼にとっても相当に集中的な採集旅行であったと思われる。

## 2. それまでの経緯

シャープはイングランド民謡・民俗舞踊の権威であった。サマセット州などを中心とする民謡収集をおこなって結果を1904年以降公表しており、1907年に出版された『イングランド民謡論——若干の結論 (*English Folk Song: Some Conclusions*)』<sup>(5)</sup>は初めての本格的な民謡論であった。また、一連のモリス・ダンス、カントリー・ダンス、ソード・ダンスの記録を1907年から刊行しており、アメリカ訪問以前にその大半は世に出ていた。1911年にシャープが中心となって創設されたイングランド民俗舞踊協会 (English Folk Dance Society) などを通じて彼は精力的に活動をおこない、民俗舞踊の普及に努めていた。1910年代前半はむしろ民俗舞踊に入れ込んでいた<sup>(6)</sup>といえよう。

それならば、なぜ関心を急にアパラチアに向けたのであろうか。「オリーヴ・デイルム・キャンベルの勧めに従ってアメリカにやってきた」<sup>(7)</sup>と言われることがあるがこの評言は誤りであって、正確に言うとシャープはアパラチア民謡を求めてアメリカに渡ったのではなかった。少なくとも、当初はアパラチアは彼の関心の外に置かれていた。シャープがルシタニア号 (翌年にドイツ潜水艦によって撃沈されるイギリスの客船) に乗って初めて渡米したのは、1914年12月、グランヴィル・バーカー (Granville Barker) の要請で『夏の夜の夢』のニューヨーク公演に同行してその演出 (特に劇中の音楽と舞踊) に協力するためであった。「第1次世界大戦のためにイギリスでの仕事を諦めざるをえなくなり、講演をするためにアメリカへやってきた」<sup>(8)</sup>とも言われているが、報酬はわずかであるにせよ表向きは劇の演出の手助けのためであり、講演の仕事のほうはアメリカに来てから探すことになる。すでにシャープが作曲した劇用音楽は出版もされていた。翌1915年にリハーサルが終了すると、彼はニューヨーク、ボストン、ピッツバーグ、シカゴ、フィラデルフィア、ピッツフィールド (マサチューセッツ州) で民俗舞踊の講演と指導の講習会をおこない (これは収入が大きな目的でもあったが)、イングランド民俗舞踊協会のアメリカ支部を設立する。4月

から一旦イギリスに帰国するが、2カ月ほどでまたアメリカに戻り、さらに1年ほど滞在し、メイン州エリオット (Eliot) で開かれたサマー・スクールなどを主催して指導と講演を引き続いておこなう (この時カーピリーズもすぐ後から渡米する)。シャープが初めて間接的ながらアパラチア民謡を知るのはこの頃であった。

ことの始まりは次のとおりである。先述のジョン・キャンベルはラッセル・セイジ財団 (Russell Sage Foundation) の南部高地地区担当責任者 (Director of the Southern Highland Division) を勤めており、キャンベル夫妻は同財団のレクリエーション部門主任のウィリアム・チョーンシー・ラングドン (William Chauncy Langdon) と知り合いであった。ある時ラングドンは、イングランドから演奏旅行に来ていたザ・フラーズ (the Fullers) というカルテットがイングランドのバラッドを歌うのを聞き、そのあとで、彼らにジョンの妻オリヴ・デイル・キャンベルが採譜したアパラチア民謡を見せた。メンバーの一人ロザリンド・フルー (Rosalind Fuller) は、多くの歌は「自分たちが歌っているドーセットとサマセットのものよりも純粹で古い」と言い、幾つかを自分の以前の教師であったセシル・シャープに送ったのであった。シャープはそれを見て、早速採集者のキャンベルに会うことを望んだ。オリヴ自身はそれまでに225のバラッドを集め、その手稿を以前 (1911年) に財団理事長のジョン・グレン (John Glenn) に託していた。彼は出版の可能性を打診したが商業的出版には向かないとの反応を得ており、タフツ大学 (オリヴの母校) のリーオ・ルイス (Leo Lewis) やハーヴァード大学のジョージ・ライマン・キトリッジ (George Lyman Kittredge) に送って意見を聞いたところ、兩人ともその価値を認めたという<sup>(9)</sup>。しかし公刊の機会がないままになっていたのであり<sup>(10)</sup>、ちょうど折よく「セシル・シャープがアメリカにいることを聞き及んで、彼女 [オリヴ] はシャープの助力と関心を求めてわざわざ南部からやってきた」<sup>(11)</sup>のであった。

6月の終わりに、まだサマー・スクールの始まる前、シャープは痛風からくるひどい腰痛のため歩行も困難で、マサチューセッツ州リンカン (Lincoln) のストロウ (Storrow) 邸 (夫人がシャープの民俗舞踊運動の熱心な後援者であった) で静養していた。そこへ採集した民謡を携えてオリヴ・デイル・キャンベルが訪ねて来たのである。シャープは熱心に記録をながめ、採集方法などを尋ねた。歌を大まかに書き留めて旋律を覚え、持ち帰ってピアノに合わせて記譜し、歌い手のところにまた出掛けて照合するという方法は、記録としては「非科学的だ」と評したものの、それまでいかに多くの人々が彼のもとに「バラッド」を持ち込んできたのかを説明し、「ほんとうにオリジナルで価値のある資料に出会ったのはこれが初めてだ」<sup>(12)</sup>と述べた。

7月にシャープはキャンベルのコレクションを持って<sup>(13)</sup>カーピリーズといっしょにイギリスへ帰る。妻の病、引っ越し、出版などあわただしさの中、シャープはアメリカに戻ることを考える。戦時により民俗舞踊運動が中断される恐れがあり、収入もままならぬ状態であった。さらに、何としてもアパラチアに行ってみいたいという希望があった。1915年8月付けの手紙で、シャープはキャンベルに助力を求めている。地域と人々と資料に関するキャンベルの知識を評価し、自分は経験と音楽的・科学的知識を提供できると言う。ヘンリー・シャピロの言葉によると「彼女は鉱山を所有して、掘る作業は彼がする」<sup>(14)</sup>のである。具体的には、共同作業を行い、成果を両者の名で刊行することを提案している。これに対して、キャンベルも願ってもない申し出と受け取った<sup>(15)</sup>。そこで資金のつてを探して、カーネギー財団の援助を期待したが、同財団からの返事は来なかった<sup>(16)</sup>。

当てのないまま1916年2月に3度目の渡米をして、ニューヨークで講習・講演の催しを企画する。じきに、収入をえるのに十分な仕事の契約(7月半ばまで)を結ぶことができ、ピッツバーグやシンシナティなど各地に出掛ける。この間(春に)アッシュヴィルにも採集旅行の計画の相談のためキャンベルのもとに立ち寄っている。キャンベル夫人のコレクションを再度点検し、独力でなした業績としては水準が高く、彼女は「科学的かつ芸術的な精神を合わせ持った人」で後世に役立つ仕事をしている、との感想を述べ、現状は急速に伝承を破壊しつつあるとの感を強くした<sup>(17)</sup>。6週間にわたる緊張が続く仕事と長い鉄道旅行が身体にこたえて、シャープは講習や事務連絡の手助けをしてもらうためにカーピリーズをイングランドから呼び寄せる。1916年はシェイクスピア没後300年に当たり催し物も多く、シャープにとって仕事は順調だった。パーシー・マカイ(Percy Mackaye)の劇『キャリバンの仮面(Masque of Caliban)』の中間劇はエリザベス朝のメイ・デイ祭りであり、シャープはその音楽を作曲し舞踊の演出もした。この中間劇は各地で上演され、サマー・スクールが始まるころまで劇の仕事に追われた。ようやく準備ができてアパラチアに採集旅行に出掛けるのは7月下旬になってからのことだった。

### 3. 採集の現場で

すでにイングランドでの経験が豊富であるとはいえ、交通の便の悪い見知らぬ土地での調査であるし、年齢も若くはなく健康状態もよいとはいえない。それなのに、なぜに熱心に採集をおこなったのであろうか。一つには、シャープにとってアパラチア

民謡は「外国」のものではなかった。調査開始当初に「彼らはまさにイングランドの農民で、私にははっきりとしたアメリカ的特徴がないように思える。話し方も、歌い方も、態度もイングランド風なのだ」<sup>(18)</sup>と書き送っている。そこは故国ではすでに廃れた文化が生き残っている土地であった。それが急激に変化を遂げようとしていることを実際に目にし耳にして、すぐに調査採集をしなければ廃れてしまうという危機感があった。文化は言語によって規定されるという信念からすると、言語の「古さ」は明らかな証拠である。

シャープはアパラチアの言葉（語彙・発音）は「アメリカではなくて（昔の）イングランドのものである」と言い、三人称単数代名詞 *hit* がいまだに使われていることを例に挙げる<sup>(19)</sup>。カーピリーズはそれに注を付けて、*OED* の最後の例として 1586 年のエリザベス女王からの引用例を示す<sup>(20)</sup>。彼女はこの事実を示しているだけであり、「彼らはエリザベス朝の人間だ」とは言っていないが、アメリカ英語が発音・語彙のいずれも古い英語を継承しているのは常識であってアパラチア英語だけに見られる特徴ではないにもかかわらず、暗示するところは明らかである。このような見解はシャープら独自のものではなく、たとえばチャールズ・モロー・ウィルソンは『アトランティック・マンスリー』誌で「エリザベス朝のアメリカ」という論文を発表し、これはタイトルそのものが示しているように、アパラチアとオーザークの言葉（そして文化）がアメリカではなく昔のイングランド（イングランド人にとっては *Merrie England*）のものであることを主張したものである<sup>(21)</sup>。人によってはさらにチョーサーまで遡り、ジョン・フォックス・ジュニアなどは「南部山地の人の言葉を通してチョーサーが生きていた遠い過去にまで触れることもありうる」<sup>(22)</sup>ともいう。「アパラチア山地の子供たちが読み書きを習い始めるころ、シェイクスピアに非常に顕著な好みを示すものだから、彼らが利用できるいかなる図書館にも必ずといってよいほど製本して備えておくのはシェイクスピアの作品集である」<sup>(23)</sup>との報告もある。だが、限られた語学的特徴で言語の時代を決定しようとする誤謬は、子供たちにもすぐに理解できたようだ。1914 年に地元ケンタッキー州ノット郡 (Knott) の僻地にあるハインドマン・セツルメント学校 (Hindman Settlement School) では、実際に自然な「エリザベス朝」の言語でのシェイクスピアの『夏の夜の夢』の上演を試みているが、バック役の子供の男の子は「僕たちの言葉で役をやらしてもらえたら、もっとうまく覚えられるのに」と不平をもらしたという<sup>(23)</sup>。なお、シャープもカーピリーズも言葉が通じなかったという報告はしていない。少なくともイングランドの「田舎」よりも苦勞したということはないようで、さもないとすれば速記で歌詞を書き取ることはできなかったはずだ。

いずれにしても、イングランドからやってきた民謡採集者にとってアパラチアは自然がゆたかな「楽園 (paradise)」であって、人々はより自由な生活をしているが「100年以上前のイングランド農民とまったく同じ」<sup>(24)</sup>である、との感想を述べている。シャープがイングランドで収集を始めた(1903年)ころ、すでに民謡は流行歌謡に侵食されて廃れかけているという思いを抱いていた。若い世代は民謡を好まないし、60歳以下の人は民謡をほとんど知らない<sup>(25)</sup>との認識があった。イングランドではバラッドの収集はあちらこちらに暮らしている古老を探し出して彼らから聞き出す作業であった。ところが、ここアパラチアでは老いも若きも歌い、「生まれて初めて、歌うことが話をすると同じように一般的でほとんどすべての人々にまで行き渡っている地域社会にいるのだ」と実感し、「この特別な芸術は毎日の生活の日常的な営みと絡み合っている」ことを感じた。「絡み合っている」例として、歌い手が頼まれた歌を思い出せずに「いま家に牛を追って帰るところならば、すぐに歌えるのだが」と述べたと、シャープは報告する<sup>(26)</sup>。そうであっても、「本当のところは、シャープが発見した古い歌はその地域特有のものではなかったし、世間一般に考えられているほどは孤立した地域でもなかった」<sup>(27)</sup>のであり、まして「ブリガドゥーン (Brigadoon)」<sup>(28)</sup>のような世界に入り込んでいたのではない。

しかし、「楽園」であるかぎり、もう一方では、「文明」ないしは都会文化の侵入をこころよく思わなかった。1950年と1955年にアパラチアを再度訪れたカーピリーズは「悲しいかな、1916年から1918年にセシル・シャープと私が見いだした状況は持続しなかった。その土地は切り開かれてしまい、道路が建設されて、蛇がラジオとレコードという姿をしてこのエデンの園に侵入してしまっていたのだ」<sup>(29)</sup>と述べた。このような感慨は民俗学者や人類学者にしばしばみられるので彼女たちに特有なものではないが、地元の人々あるいは彼らを支援してきた人たち(キャンベル夫妻を含めて)の意識とは相いれないものがあつたろう。民謡歌手ジーン・リッチー (Jean Ritchie, 1922-) の祖父 (Austin Ritchie) はシャープの資料提供者の一人 (No. 172A: “Farewell Dear Rosanna”) であったが、リッチー家は1905年にシアーズ・ローバック社から蓄音機を購入していて、レコードからもいろいろな歌を覚えたという<sup>(30)</sup>。シャープたちは蓄音機存在を知らなかったようであるが、知っていたらどういふ反応を示しただろうか。

ある興味深い出来事をカーピリーズは記している。1918年の調査のときに、シャープたちは「ドイツのスパイ」ではないかとのうわさが流れた。夕べの祈りのあとで会衆が、2人は極めて怪しげな人物であつて泉に毒を入れるなどという不埒な行為を隠

蔽するために民謡の収集をしているのだ、と話し合ったことを間接的に知らされた<sup>(31)</sup>。第1次大戦中にシャープが宿泊する予定のホテルがドイツ兵収容所になった(1917年6月)ことが引き金になったのであろうが、戦争中に民謡の採集に熱中しているということ自体も理解を越える行為であったのかもしれない。疑いが完全に晴れたのか否かはわからないが、いずれにしても、地元の人々が心の奥まで開いて協力したとは言い難い<sup>(32)</sup>。

アパラチアは山地ではあっても独立戦争以前からさまざまな人々が生活をしてきたところで、宣教学校やセツルメント学校があちこちに建てられていた。一般には、文明の恩恵に恵まれず、生活水準も「非常に低い」と考えられていた。だが、シャープは突如未開の僻地に単身で飛び込んでいったのではない。実際には長老派の宣教学校などを「基地」にして、地元の人々に紹介してもらいながら、シャープは歌い手を探し求め、歌を記録していったのである。すでにシャープよりも前から、民謡の採集や調査は行われていた。アパラチアに関する1850年代から1922年に至る詳しい文献リスト<sup>(33)</sup>によると、19世紀末から次第に民謡・音楽関係が増えてくる(ことに1917年では、25件のうち12件という高率である)。多くは論文・報告記事などであるが、単行書の形になったものにはHubert Gibson Shearin and Josiah H. Combs, *A Syllabus of Kentucky Folk Songs* (1911); Loraine Wyman and Howard Brockway, *Lonesome Tunes: Folksongs of the Kentucky Mountains* (1916); Josephine McGill, *Folk Songs of the Kentucky Mountains* (1917)がある。つまり、この地の民謡収集は決してシャープが最初に始めたわけではなく、ちょうど盛んにおこなわれるころにシャープが登場したというのが真実である。ただ、多くは歌詞が中心で旋律の記録についても信頼度が低かったので、それだけシャープの民謡集の水準の高さが目立つのである。

記録の方法は、歌を聞きながら、シャープが旋律を採譜し、カーピリーズが速記で歌詞を書き取るというものであった<sup>(34)</sup>。録音機を利用しなかったのには3つの理由がある。当時の録音機は山地を移動しながら運ぶには克服できない困難が伴うこと<sup>(35)</sup>、機械を前にすると歌い手が緊張して自然な歌唱ができなくなってしまうこと<sup>(36)</sup>、それに対象が器楽曲ではなくて無伴奏の歌であったことがあげられる。幸いなことにシャープは音楽家であったから、採譜に苦労はなかったし、書き取ったものをその場で歌い手に見せたり、歌って「再生」したりした。

歌い手は記録者が求めるものだけを提供した。たとえば、ジェーン・ヒックス・ジェントリーからシャープは70の歌を記録し、そのうち40が民謡集に収められている

が、たくさん知っていた聖歌 (hymn) はほとんど記録されずに終わった<sup>(37)</sup>。シャープの民謡集をみると約半分がバラッドであるが、それはシャープがバラッドを求めていたからであって、アパラチアの民謡の半分がバラッドであることを意味しない。イギリス系の民謡を求めれば、アメリカ生まれの民謡は除かれてしまう。昔の民謡を求めれば現に作られている民謡は見向きもされない。もちろん春歌 (bawdy song) の類いも含まれていない。職業歌謡 (occupational song) とでもいうべき炭鉱生活に関する歌もシャープの関心を引かなかった。昔の流行歌がいかにも民謡化しようとも採録されない。器楽曲も採集の対象ではなく、それに合わせて歌われた歌謡も採録されていない。20年代から始まる商業録音 (カントリー音楽の源流) がシャープの民謡集に直接つながらずに、かなり大きな相違があるのは、こうした事情が背後にあるからである。少なくとも「すべての種類の歌謡を収集した」<sup>(38)</sup>とはとうてい言えない。この点をもう少し詳しくみておこう。

宗教歌謡に対して、民謡学者たちは相当に強い偏見を抱いていたようで、「民謡集」にはあまり収録されないのがふつうである。きわめて強いロマン主義に支えられたこの時代 (そして最近にいたるまで) の民謡観では多くの宗教歌謡を民謡とは認めていない。ただし、初めてアメリカの民謡として認められたのが「黒人霊歌」であることからすると、宗教性そのものが問題にされたのではない。ある種のアメリカの白人の宗教歌謡を調査して民謡として取り扱ったのはジョージ・ブレン・ジャクソンで、『南部高地地方の白人霊歌』(1933)、『初期アメリカのスピリチュアル民謡』(1937)、『東部沿岸地方の霊歌』(1943)、『白人霊歌と黒人霊歌』(1944)<sup>(39)</sup>などの著作で宗教民謡の存在を広く紹介したが、時代的背景からしてもシャープの関心は宗教歌謡に向けられていない。「シャープが山地への旅行で収集しようとしなかった歌謡は宗教民謡である」<sup>(40)</sup>とまで言われている。正確さを期すると若干の宗教歌謡 (5曲) を書き留めているのでまったく無視してはいないが、宣教師 (長老派か?) たちが教える聖歌については「音楽的にも文学的にもがらくた (garbage) だ」<sup>(41)</sup>と言う態度と無関係ではあるまい。また、ホーリネス派の人から“love-song”を聞き出すのに苦勞した話を伝えている<sup>(42)</sup>が、聞くべきだったのはホーリネス派 (新興の教派だからシャープの好みには合わなかったであろうが) とかオールド・レギュラー・バプティスト派の音楽・歌謡そのものではなかったのか<sup>(42)</sup>。

春歌 (というより、多くは歌詞の一部のみに関係するが) を、歌詞を書き取っている英国女性の前で (あるいは地元の女性がシャープに向かって) 堂々と歌うわけはないし、別の機会にひとりシャープだけが聞いたか否かも疑わしいが、わざわざ求めな



かったことは確かであろう。またたとえ記録したとしても出版の可能性はなかった（ついでながら、アメリカで「猥褻図書」追放運動に生涯を捧げたアンソニー・カムストック（Anthony Comstock）が死んだのは1915年のことである）。しかし、イングランドにおいて収集された民謡では「品位に欠ける」歌詞も記録されており、民謡集に収めるときには大幅に書き換えをおこなった<sup>(43)</sup>。歌詞を書き換えずにそのまま出版することを前提とした採集であるならば、はじめから収集せずに存在そのものを認めないことが一番簡単な対応であったのかもしれない。春歌を含まない民謡集（ということは、ほとんどすべてである）はまず相当なふるいがかけられたり編集が行われたと見て差し支えがない、とも言われる。アパラチアの春歌はおそらくまだに出版されていないしはたしてまとまった記録があるのか否かも不明であるが、オーザーク山地についての記録<sup>(44)</sup>を見ると、同程度は歌われていたと推定される。シャープは何も語っていないし記録もないので、以上は推測にすぎないが、かなり当たっているのではなかろうか。

職業民謡が排除されていたわけではないが、シャープにその関心は弱かった。民謡とはもっと牧歌的なものを指していたようで、ちょうどその頃編集していた民謡集では“folksongs proper”に限定するとして「キャロル、シー・シャンティー、子供のゲーム、わらべうたなど」を排除している<sup>(45)</sup>。アメリカではジョン・A・ローマックスのカウボーイ民謡の収集<sup>(46)</sup>を初めとして職業民謡も対象としているが、シャープを中心としたイングランドの民謡運動では職業民謡（特に労働者階級の民謡）は注目されていなかった。これに目を向けるのはロイドなどからである<sup>(47)</sup>。アパラチアの主要な産業である石炭鉱業はシャープの「楽園」を破壊するものでもあったし、そこに古いバラッドが残っていると考えられなかったのであろう。シャープもカーピリーズも炭鉱地帯の話はしていないので、そもそも炭鉱地帯に行きたいという希望はなかったようである<sup>(48)</sup>。

アパラチアの歌謡や音楽文化の全体像は初めから目標ではなかった。地元の人々の好む歌や音楽をそのまま記録するつもりもなかった。カーピリーズは1950年に“The Little Rosewood Casket”について「それは民謡ではない。曲もよくない。40年前にアパラチア山地にいたとき歌われていたが、わざわざ記録することはしなかった」<sup>(49)</sup>と述べた。この歌が民謡と同じように伝承されてきたことは明らかであり、最近のカントリー音楽でもレパートリーになっているところをみると「曲もよくない」とは思われていないようだが<sup>(50)</sup>、彼らの目標は「歌の伝承」という行為ではなくて「古い（それもイングランド起源の）歌を記録すること」であった。また、楽器に対し

ては、多くの民謡学者と同様に、シャープは音楽家でありながらほとんど注目していない。ただし、楽器の伴奏による歌がまったく収録されていないとはいえない。“The Two Brothers” (No. 12B) の注において、ギター伴奏で歌われたので旋律に和声的特徴があるのだろう<sup>(51)</sup>と推測している。ダルシマー<sup>(52)</sup>については言及しているが、カーピリーズは「家庭では全く見かけなかった」<sup>(53)</sup>という。この点についてチャールズ・ジョイナーは、彼らが多くを見かけなかったのは「ダルシマーではなくてバラッドとソングを探していたからである」<sup>(54)</sup>と言う。明らかにイギリス生まれの楽器ではないことも関係したのであろうか。すでに盛んであったと思われるストリング・バンドについては全く報告がない<sup>(55)</sup>。

さらに付け加えるなら、シャープとカーピリーズは黒人音楽についてほとんど何も語っていない。「イングランド民謡集」であるから当然のこととも思えるが、聖歌として挙げている5曲のうち3曲 (“Sinner-Man”, “Hold On”, “Jacob’s Ladder”) までが黒人起源かその影響を受けていることをさりげなく認めている（他にもソングの“The Crow Fish Man”, ジッグの“Eliza Jane”など）。また、唯一聞いた器楽曲はジッグであり、フィドルが「独特で風変わりな演奏」をする、機会があれば出版したい<sup>(56)</sup>とも言っていたが、カーピリーズは「ダンス曲の伴奏として演奏される器楽曲はほとんど価値がない」<sup>(57)</sup>として、出版は実現しなかった。バンジョーはフィドルとともにもっとも一般的な楽器であったが、これについても、他の収集者と同じく、シャープは見向きもしていない。新しく導入された楽器であり伝承文化を破壊するものとみなされたのかもしれない<sup>(58)</sup>。もしかすると黒人起源の楽器ということも絡んでいる、と疑いたくもなる。つまり、純粋なアングロ・サクソン文化を求める者としては、バンジョー一曲をとおして黒人音楽の影響を考慮することは避けなくてはならなかったのであろうか。

#### 4. アパラチア民謡の出版

第1回目（1916年）の採集結果はオーリーヴ・デイム・キャンベル（筆頭著者）との共著として、彼女が1907年から1910年にケンタッキーとジョージアで集めた32曲（異版数42）を合わせて、122曲（異版数323）が1917年11月に『南アパラチア地方からのイングランド民謡集 (*English Folk Songs from the Southern Appalachians*)』<sup>(59)</sup>としてニューヨークのパトナム社から出版された。後の調査旅行も合わせた増補決定版は、シャープの死後カーピリーズが編集をして、シャープの単著<sup>(60)</sup>と

して1932年に同じタイトルで<sup>(61)</sup> オックスフォード大学出版局から2巻(1960年に1巻本)で出版された。本文(索引を含む)は410+428頁からなり、キャンベルの32曲も含むが、ほぼ同種類の異版などを削除して総計274曲(異版数968)を収めており、シャープの前著の序文(17頁)はそのまま残して、新たにカーピリーズの序(9頁)と採集地の地図を付けたものである。なお、これには100頁ほどの「超」簡約版<sup>(62)</sup>があり、シャープとカーピリーズの共著として1968年に出版された。

この他には、2冊だが、実質は同内容のアパラチア民謡集(*American-English Folk-Songs*, 1918; *Folk-Songs of English Origins collected in the Appalachian Mountains*, 1919, 1921)とアパラチアわらべうた集(2冊)をシャープは生前に刊行しているが、それらは例によってそれまで出版されてきたイングランド民謡集と同じく一般向けの歌集である<sup>(63)</sup>。たとえば、*Nursery Songs from the Appalachian Mountains* (Novello, [1921])は当時の絵本わらべうた集と同様の体裁の作りになっており(挿絵はEsther B. Mackinnon)<sup>(64)</sup>、歌詞や旋律を「補正」(つまり、収集されたままではなく他の版からの歌詞・旋律などを利用して修正することなど)してピアノ譜(シャープ編曲)を付けたもので、序文や曲目解説はなく採集のデータ(年月日、場所、歌い手)等も付されていない。民謡以外ではフォーク・ダンスの記録があり、1909年以来シリーズとして刊行してきた*The Country Dance Book*の第5部(Part 5)はアパラチアからのもので、カーピリーズとの共著で“The Running Set from Kentucky”として1918年に出版された<sup>(65)</sup>。なお、1920年に刊行したイングランド民謡集の解説において、アパラチアのヴァージョンの有無について言及するなど、成果を利用している<sup>(66)</sup>。

決定版民謡集のタイトルは『南アパラチア地方からのイングランド民謡集』である。シャープの民謡集は、1904-9年のチャールズ・マーソンとの共編『サマセット民謡集(*Folk Songs from Somerset*)』また1908年のH. E. D. ハモンド編『ドーセット民謡集(*Folk-Songs from Dorset*)』でも採集の地域は“of ~”ではなく“from ~”という表現で示されていた<sup>(67)</sup>。明らかに、民謡を移動する物・記録可能な物として扱っている態度がよく表れている。それだからこそ、「イングランド民謡」と呼ぶことに抵抗がなかったのであろう。さもなければ、*Anglo-American Folk Songs of the Southern Appalachians*とでもすべきであった。

1932年の民謡集は、第1巻がすべてバラッドに充てられており、まず45編の「チャイルド・バラッド」をチャイルド番号順に、続いて27編のその他のバラッド(ブロードサイド系など)が配列してある。第2巻は、ソング(135編)、聖歌(5編)、わらべ

うた (27 編), ジッグ (15 編), プレイ・パーティ・ゲーム (20 編) となっている。各バージョンには、チャイルドと同じく、アルファベットが付されており、多いものでは 11 (Nos. 28, 44), 12 (No. 13), 13 (Nos. 7, 10, 12, 18), 14 (No. 5), 16 (No. 24), 17 (Nos. 20, 23), 19 (No. 22), 22 (No. 35), 31 (No. 19) である。それぞれのバージョンには旋律を記録し、音階とモードの指定、歌い手の氏名 (Mr., Mrs., Miss の敬称を付けて)、採集地 (州名・郡名および多くは町村名も) と年月日が付されている (ごく少数だが子供たちの歌では氏名がないものがある)。ただし、キャンベルの採集では、記録は年月までであったり、もう一方では歌詞のみのバージョンが 3 ある (No. 44F, No. 207B, No. 207C)。原則として A ヴァージョンは歌詞 (おそらくは全歌詞) が付けられているが、B 以降では歌詞が一部 (たいていは第 1 スタンザ) だけのものは少なくなく、中には旋律のみのもの (No. 19C, G, W, Z; No. 22G) もある。しかし、旋律については詳しく同一のバージョンでもスタンザによる旋律の相違が記録されている (No. 20A, No. 4A, B)。

編集方針は一般の民謡集とは大きく異なって、そのまま収録するのが原則であった。特に、歌詞についてはところどころに“(sic)”を付したまま書き取っている。なお、カーピリーズは、一般向けの歌集としての簡約版の編集に際しては率直に以下のように言う。「旋律は採譜されたとおりに、変更を加えず、印刷されている。しかし、これと同じようにすべてのテキスト (歌詞) を取り扱うことはできなかった。というのは、歌い手が我々に必ずしも完全な揃った形で歌詞を提供したとは限らないからだ。テキストが不完全であったり難解 (abstruse) であったりした場合には、他のバージョンからの行 (lines) や歌詞で補った。ある旋律を他の歌い手のテキストに結び付けたこともある。また、場合によっては、いろいろなバージョンから一つの編集版を作らざるをえなかった。」<sup>(68)</sup>そして、どのバージョンからテキストを作ったのかという編集作業を具体的にそれぞれの注で述べている。

## 5. おわりに

バートランド・ハリス・ブロンソンは「もし他の記録がすべて破棄されたとしても、これが 20 世紀初めの 25 年におけるイギリス系アメリカ民謡の損なわれていない伝承状況を正しく代表する記録となるであろう」<sup>(69)</sup>と評価する。この言葉からは、チャイルド・バラッドの旋律の集大成<sup>(70)</sup>に際して、シャープのアパラチア民謡集が主要な出典となっていることを実感していたことが読み取れる。短期間に、特定の地域で、

目的をしぼり、同一の方法を用いておこなったフィールドワークの調査報告であり、成果の発表を初めから意図していた。多くの民謡集はここまで徹底していなので、往々にして結果は均一性に乏しく信頼度も低かった。とくに旋律の記録について包括的に調査をおこなったという点は評価が高い。単に旋律を集めた記録ではなく、一地域の記録としての価値を認めたい。ことにシャープがイングランド民謡でこれに匹敵する民謡集をそれまで出していなかったことを勘案すると<sup>(71)</sup>、画期的な出版であった。調査のみならず編集方法などについても後続する民謡集に対する影響はとて大きい。大きかったからこそ、チャイルド・バラッドを中心に収集・編集する態度もあまり批判されることなく継承された。

しかし、もう一方では、批判や不満が聞かれる。バラッド中心の限定されたレパートリーとか、器楽曲の無視などに加えて、イングランド中心の態度<sup>(72)</sup>、歌い手・地域社会・他の地域文化に対する理解不足など、現代の観点からすると欠点はたくさんある。シャープは文明に汚染される前に「アパラチア民謡の最良部分をすくい取った」<sup>(73)</sup>のであって、このあとさらに調査を深化させることなく、次に計画していた調査地はアパラチアではなくニューファンドランドであった<sup>(74)</sup>。アパラチアにはもう用がなかったかのように。

アメリカ側としては、アングロ・サクソンの独自の文化が組織的に調査され明らかにされたわけで、古めかしくみえる文化は工業化以前の文化であり、アパラチアの住民は「同時代の我らの先祖 (our contemporary ancestors)」<sup>(75)</sup>とされていた。この人々が貧困の中で暮らすのは民主主義国家として容認しえないことであり、文化の価値を重視するとともに社会生活の改良に援助を惜しまないという態度をとることになる。シャープはイギリス人であるから、彼らの生活改善に対してはたいして関心を向けなかった<sup>(76)</sup>。ただ民謡のテキスト化のみに目を向けたことが、シャープの成功であったしまた限界でもあった。

## 注

1. 「採訪」という表現が好まれることがあるが、英語では collecting であるので「採集、収集」としておく。
2. 以上は Maud Karpeles, *Cecil Sharp: His Life and Work* (Routledge & Kegan Paul, 1967, pp. 135, 143) [以下 *Sharp* と略記]; Cecil Sharp, *English Folk Songs from the Southern Appalachians*, edited by Maud Karpeles (Oxford U. P., 1932, 1960, pp. xxi-xxii) [以下 *EFSSA* と略記]; Betty N. Smith, *Jane Hicks Gentry: A Singer Among Singers* (Univ. Pr. of Kentucky, 1998, p. 67) による。以下、シャープの経歴と活動に関

- する事実関係については細部に至るまでいちいち出典を明記しないが、主として *Sharp* に従い、David E. Whisnant, *All That Is Native & Fine: The Politics of Culture in an American Region* (Univ. of North Carolina Pr., 1983) などを参照した。
3. Karpeles, *Sharp*, pp. 141, 168; *EFSSA*, p. xii.
  4. Maud Karpeles, *An Introduction to English Folk Song*, revised by Peter Kennedy (Oxford U. P., 1987), p. 94.
  5. この著書については拙稿「セシル・シャープの民謡観について」(『一橋論叢』88 卷 6 号, 1983, pp. 87-102) を参照。
  6. Karpeles, *Sharp*, p. 109.
  7. Ivan Tribe, *Mountaineer Jamboree: Country Music in West Virginia* (Univ. Pr. of Kentucky, 1984), p. 6.
  8. Evelyn Kendrick Wells, *The Ballad Tree* (Ronald Press, 1950), p. 263.
  9. 以上の記述は、主にラングドンの手紙(未公刊)に基づいた Whisnant, *All That Is Native & Fine* (pp. 111-114) による。ただし、オリーブの著書に基づいた Smith, *Jane Hicks Gentry* (pp. 66-67) では、グレンには言及せず、オリーブ自身がリーオ・ルイスやキトリッジに手稿を送ったところ彼らは熱烈な興味を示したなどと、若干のくいちがいがある。
  10. 正確にいうと、キャンベルは“Songs and Ballads of the Southern Mountains”を *Survey* 33, pp. 371-74 (2 Jan. 1915) に発表している (Shapiro, *Appalachia On Our Mind*, p. 333)。
  11. Karpeles, *Sharp* (p. 130) では、なぜかこの 1 文以外に出会いに至るまでの経緯について言及していない。*EFSSA* でも同じである。
  12. Karpeles, *Sharp*, pp. 130f.
  13. Whisnant, op. cit., p. 113. この話も *Sharp* には書かれていない。
  14. Henry D. Shapiro, *Appalachia On Our Mind: The Southern Mountains and Mountaineers in the American Consciousness, 1870-1920* (Univ. of North Carolina Pr., 1978), p. 254. シャープ自身も“mine”という比喩を使っている (*Sharp*, p. 131)。
  15. Karpeles, *Sharp*, p. 142.
  16. *Ibid.*, p. 132.
  17. *Ibid.*, p. 141.
  18. Whisnant, p. 116.
  19. *EFSSA*, p. xxii.
  20. Karpeles, *Sharp*, p. 149.
  21. Charles Morrow Wilson, “Elizabethan America” (*Atlantic Monthly*, 144, Aug. 1929), reprinted in W. K. McNeil, ed., *Appalachian Images in Folk and Popular Culture*, 2nd ed. (Univ. of Tennessee Pr., 1995), pp. 205-214.
  22. John Fox, Jr., “The Southern Mountaineer” (*Scribner’s Magazine* 29, April-May 1901), reprinted in McNeil, *Appalachian Images*, p. 123.

23. Whisnant, p. 57.
24. *Sharp*, pp. 145-6.
25. Cecil J. Sharp, *English Folk Song : Some Conclusions*, 4th ed., prepared by Maud Karpeles (Mercury Books, 1965), pp. 133, 150.
26. *EFSSA*, p. xxv.
27. Charles K. Wolfe, *Tennessee Strings : The Story of Country Music in Tennessee* (Univ. of Tennessee Pr., 1977), p. 6. これとともに、重要な点であるが、約半数の歌はアッシュヴィル(市電が走っていた)やシャーロットヴィル(ヴァージニア大学所在地)などの「都会」の近くで採集されたもので決して山の中ばかりからではなかったし、多くの採集が行われたホット・スプリングズ(Hot Springs, N. C.)でさえも半世紀のあいだ保養地として栄えてきたところである(Whisnant, p. 119)。
28. Alan J. Lerner and Frederick Loeweのミュージカル(1947)で、100年に1日だけこの世に姿を現すという「桃源郷」のようなスコットランドの僻地の村に迷い込んだ2人のアメリカ人男性の物語。
29. Karpeles, *Introduction to English Folk Song*, p. 98;ただし, *Sharp* (p. 170); *EFSSA* (p. xx) では蛇とエデンの園のたとえを使っていない。
30. Jean Ritchie, *Singing Family of the Cumberlands* (1955; Univ. Pr. of Kentucky, 1988), pp. 73-74; Whisnant, p. 95.
31. *Sharp*, pp. 165-6; Smith, *Jane Hicks Gentry*, pp. 71-2.
32. この点については, Robert A. Georges and Michael O. Jones, *People Studying People : The Human Elements in Fieldwork* (Univ. of California Pr., 1980, pp. 58f) でも論じられている。
33. Shapiro, *Appalachia On Our Mind*, pp. 310-40.
34. Jane S. Becker (*Selling Tradition : Appalachia and the Construction of an American Folk, 1930-1940*, Univ. of North Carolina Pr., 1998) は写真 (p. 61) のキャプションで、アパラチアでシャープとともに採集作業をしている女性を「キャンベルか(?)」としているが、彼女はカーピリーズである(Karpeles, *Sharp*, facing p. 133 および Smith, *Jane Hicks Gentry* に掲載された同一の写真を参照)。
35. Karpeles, *Sharp*, p. 154;
36. Smith, *Jane Hicks Gentry*, p. 73. シャープなどがイングランド民謡の収集に際して積極的に録音機を利用しなかったことに非難があるが、これは単なる「現在では信じがたい「わけのわからない」保守主義」(茂木健『バラッドの世界』春秋社, 1996, p. 216)からではなく、それなりの理由がある。シャープは1907年の民謡論の中で録音機の価値を認めている(*Some Conclusions*, pp. 90-91)が、「録音機は歌い手を神経質にする」とも言う(David Harker, *Fakesong : The Manufacture of British 'Folksong' 1700 to the Present*, Open U. P., 1985, p. 194; また、キドソンの対応については A. E. Green, "Foreword" to the 1970 edition of *Traditional Tunes* (1891), by Frank Kidson, S. R. Publishers, 1970, pp. xi-xiii)。そもそも実際の演唱スタイルを記録することが第一の目的ではなく、あくまでも旋律とテキストの収集が当面の課題であった。なお、イングランドでシャープがおこなった録音は *An Hour with Cecil Sharp and Ashley Hutchings* (Dambuster DAM 014,

- 1986) [LP] および Ashley Hutchings, *Rattlebone & Ploughjack* (1976; BGOCD 353, 1997) [CD] に若干収められている。
37. Smith, *Jane Hicks Gentry*, pp. 4, 71, 83. たった1曲 (“Jacob’s Ladder”) のみ EFSSA に収録された。
38. Terry Miller, *Folk Music in America : A Reference Guide* (Garland, 1986), p. 104.
39. George Pullen Jackson, *White Spirituals in the Southern Uplands* (1933; rpt. Dover, 1965); *Spiritual Folk-Songs of Early America* (1937; rpt. Dover, 1964); *Down-East Spirituals and Others* (1943; rpt. Da Capo, 1975); *White and Negro Spirituals : Their Life Span and Kinship* (1944; rpt. Da Capo, 1983).
40. Wolfe, *Tennessee Strings*, p. 11.
41. Karpeles, *Sharp*, pp. 153, 150f.
42. 実際には東部ケンタッキーで女性からホーリネスの聖歌を聞いており、個人的には興奮したとキャンベルに書き送っている (Whisnant, p. 119) が、「民謡」と認めていたわけではない。アパラチアの宗教音楽については、その他に Beverley Bush Patterson, *The Sound of the Dove : Singing in Appalachian Primitive Baptist Churches* (Univ. of Illinois Pr., 1995); Paul F. Gillespie, ed., *Foxfire 7* (Anchor Press/Doubleday, 1982); Howard Dorgan, *Giving Glory to God in Appalachia : Worship Practices of Six Baptist Subdenominations* (Univ. Pr. of Tennessee, 1987); Howard Dorgan, *The Old Regular Baptists of Central Appalachia : Brothers and Sisters in Hope* (Univ. Pr. of Tennessee, 1989), 音声資料 (CD) では *Children of the Heav’nly King : Religious Expression in the Central Blue Ridge* (Rounder CD 1506/07, 1998); *Songs of the Old Regular Baptists : Lined-Out Hymnody from Southern Kentucky* (Smithsonian Folkways SF CD 40106, 1997); *The Gospel Ship : Baptist Hymns & White Spirituals from the Southern Mountains* (New World 80294-2, 1977, 1994) [増補改訂して Alan Lomax, *Southern Journey, vol. 4 : Brethren, We Meet Again* (Rounder CD 1704, 1997)], 映像 (ビデオ) としては *Chase the Devil : Religious Music of the Appalachians* (Shanachie 1208, 1990); *That High Lonesome Sound : Films of American Rural Life and Music by John Cohen* (Shanachie 1404, 1996) などを参照されたい。
43. もとの記録がようやく日の目を見るのは, James Reeves, *The Idiom of the People : English Traditional Verse from the MSS of Cecil Sharp* (Heinemann, 1958); Maud Karpeles, ed., *Cecil Sharp’s Collection of English Folk Songs*, 2 vols. (Oxford U. P., 1974) においてだが, いわゆる春歌集 (あるいは, スコットランドの *The Greig-Duncan Folk Song Collection* などの学術的民謡集) に比べるとはるかに「おとなしい」歌詞である。あからさまな春歌は, シャープが知らなかったのか, 知っているも記録に残さなかったのか, いずれであろうか。シャープは “not communal productions” であって “cannot therefore be classed as genuine folk songs” (*Some Conclusions*, p. 128) という苦しい言い訳をしているが, 明らかにシャープの美学に合わなかっただけのことで, 伝承形態・脈絡からしてこれほど民謡的な特徴を示す歌謡は少ない。
44. Vance Randolph, *Roll Me in Your Arms : “Unprintable” Ozark Folksongs and Folklore, Vol. I* (Univ. of Arkansas Pr., 1992). これは, ランドルフの4巻本のオーザーク民謡集 (*Ozark Folksongs*, State Historical Society of Missouri, 1946-50) には収録さ



れなかった「(当時としては)印刷をはばかり」歌を編集しそれらに詳しい注釈を付けたもので、かなりの数が流布していたことがわかる。

45. *One Hundred English Folksongs* (1916; rpt. Dover, 1975), p. xiv.
46. John A. Lomax and Alan Lomax, *Cowboy Songs and Other Frontier Ballads*, revised and enlarged (Macmillan, 1938) [初版は1910年].
47. A. L. Lloyd, *Folk Song in England* (1967; Paladin, 1975).
48. アパラチアを中心とした炭鉱に関する歌については、必ずしも「民謡」だけではないが、商業録音を対象にした Archie Green, *Only a Miner: Studies in Recorded Coal-Mining Songs* (Univ. of Illinois Pr., 1972), ほとんどは「作者」のわかっている歌を収録している Guy and Candie Carawan, *Voices from the Mountains* (Univ. of Illinois Pr., 1975, 1982) を参照。ペンシルヴェニア州の炭鉱地帯の歌謡については、George G. Korson の *Minstrels of the Mine Patch: Songs and Stories of the Anthracite Industry* (1938; Folklore Associates, 1964); *Coal Dust on the Fiddle: Songs and Stories of the Bituminous Industry* (1943; Folklore Associates, 1965), 録音は *Songs and Ballads of the Anthracite Mines* (Rounder CD 1502, 1997) [CD]。
49. D. K. Wilgus, *Anglo-American Folksong Scholarship Since 1898* (Rutgers U. P., 1959), p. 171.
50. W. K. McNeil, ed., *Southern Folk Ballads*, vol. 1 (August House, 1987, pp. 123-126, 200-201) 参照, カントリー曲としては Dolly Parton, Linda Ronstadt & Emmylou Harris, *Trio* (Warner Bros. 9 25491-2, 1987) [CD]。
51. *EFSSA*, vol. 2, p. 388.
52. Appalachian dulcimer, mountain dulcimer, lap dulcimer などと呼ばれる楽器で hammer(ed) dulcimer ではない。Charles Seeger, “The Appalachian Dulcimer” (*Studies in Musicology 1935-1975*, Univ. of California Pr., 1977, pp. 252-272); Charles Joyner, “Sweet Music: Tradition, Creativity, and the Appalachian Dulcimer” (*Shared Traditions: Southern History and Folk Culture*, Univ. of Illinois Pr., 1999, pp. 208-227); Jean Ritchie, *The Dulcimer Book* (Oak, 1974) 参照。
53. *EFSSA*, pp. xxvii, xviii.
54. Charles Joyner, *Shared Traditions*, p. 223.
55. 約10年後からはストリング・バンドがレコードの世界(そして放送)で活躍し始め、それがカントリー音楽やブルーグラス音楽に「発展」していくことになる。ストリング・バンドだけではなく、初期録音の選集としては *The Music of Kentucky: Early American Rural Classics 1927-37*, 2 vols. (Yazoo 2013/14, 1995) [CD]。詳しくは、Norm Cohen, *Traditional Anglo-American Folk Music: An Annotated Discography of Published Sound Recordings* (Garland, 1994) 参照。なお、アパラチアに限らないが、いわゆるオールド・タイム・ミュージックについては John Cohen and Mike Seeger, eds., *The Old-Time String Band Songbook* [初版のタイトルは *The New Lost City Ramblers Song Book*] (Oak, 1964, 1976) を参照。アパラチア音楽の商品化については、Bill C. Malone, *Singing Cowboys and Musical Mountaineers: Southern Culture and the Roots of Country Music* (Univ. of Georgia Pr., 1993); Richard A. Peterson, *Creating Country*

*Music : Fabricating Authenticity* (Univ. of Chicago Pr., 1997) の関連箇所を参照。

56. *EFSSA*, p. xxvii.
57. *EFSSA*, p. xviii.
58. Whisnant, pp. 47, 55, 93. バンジョーについては Cecelia Conway, *African Banjo Echoes in Appalachia* (Univ. of Tennessee Pr., 1995) ; Karen Linn, *That Half-Barbaric Twang : The Banjo in American Popular Culture* (Univ of Illinois Pr., 1991) を参照。アパラチアの黒人音楽については *Deep River of Song : Black Appalachia* (String Bands, Songsters and Hoedowns) (Rounder 11661-1823-2, 1999) [CD] ; *Black Banjo Songsters of North Carolina and Virginia* (Smithsonian Folkways SF CD 40079, 1998) [CD], 白人のバンジョー演奏はたくさんあるが初期録音のものとして Dock Boggs, *Country Blues : Complete Early Recordings (1927-29)* (Revenant 205, 1997) [CD] を挙げておく。
59. この書名は誤って *English Folk Songs of the Southern Appalachians* とされることがある (Whisnant, pp. 106, 117, 269, 292 ; ただし p. 295 (n. 53) では正しく “from”)。
60. 正確に言うと、採集者シャープ、編者カーピリーズであり、しばしばカーピリーズの編書として引用されることがあるが、本の背文字にはシャープの名前のみが示されている。キャンベルの名前は削除されていないが、単なる資料提供者として表題紙に挙げられているにすぎない。
61. ただし 1966 年の増刷版のジャケットでは Folk-Songs とハイフンが入っている。
62. *Eighty English Folk Songs from the Southern Appalachians* (MIT Press, 1968). これにはベンジャミン・ブリテン (Benjamin Britten) によるピアノ伴奏の見本 (4 曲) が付けられている。
63. さらに、死後出版されたものとしては、イモージェン・ホールストおよびヴォーン・ウィリアムズがピアノ伴奏を付けた歌集 (それぞれ 1937 年と 1967 年) がある (Sharp and Karpeles, *Eighty English Folk Songs*, pp. 101-102)。
64. シルエットによる挿絵であり、特にアパラチアの風物を思い起こさせる絵はなく、むしろヴィクトリア朝のイングランドが背景になっているようである。表紙に、ごく一般的な山の風景が小さく描かれているが、前面の大きめの挿絵はアップライト・ピアノに座っている小綺麗に髪を刈り上げた女の子である。
65. 以上のシャープの書誌については Karpeles, *Sharp*, pp. 201-207 を参照。
66. Cecil J. Sharp, *English Folk Songs*, Selected Edition (2 vols., 1920 ; one-volume ed., 1959, Novello). これは採集旅行直前にアメリカで出版した *One Hundred English Folk-songs* (Boston : Oliver Ditson, 1916) の改訂増補版であり、アパラチア民謡 (あるいは、アパラチア・ヴァージョン) そのものは加えられていないが、該当する歌の解説には “This ballad is freely and traditionally sung in America, where I have taken it down no less than thirteen times” (p. xvii) などの新情報が追加されている。
67. ただし、シャープは『(イングランド) 西部民謡集 (*Songs of the West*)』(Methuen, 1905) にも関係しているが、これはもともとペアリング・ゲールド等の本の改訂版でシャープは編曲のみを担当。カーピリーズ自身の編著も同様に *Folk Songs from Newfoundland* (Faber, 1971) との表題を用いている (English の文字がないことにも注目)。また、

シャープ以外でも地域別民謡集の場合は“from ~”はかなり使われている。

68. Sharp and Karpeles, *Eighty English Folk Songs*, p. 101.
69. Bertrand Harris Bronson, *The Ballad as Song* (Univ. of California Pr., 1969), p. 249.
70. Bertrand Harris Bronson, *The Traditional Tunes of the Child Ballads*, 4 vols. (Princeton U. P., 1959-1972). これには簡約版 *The Singing Tradition of Child's Popular Ballads* (Princeton U. P., 1976) もある。
71. しかも Maud Karpeles, ed., *Cecil Sharp's Collection* の出版は 1974 年まで待たなくてはならない (この簡約版に Maud Karpeles, ed., *The Crystal Spring: English Folk Songs Collected by Cecil Sharp*, Oxford U. P., 1975 がある)。
72. 一般にはスコッチ・アイリッシュ (多くは長老派) が中心だといわれている地域でのイングランド民謡の採集であることを念頭に置く必要がある。その意味からするとイングランド・ナショナリズムが見え隠れしてくる。ただし、「イングランド民謡」と題しているにもかかわらず、一般にはイングランド民謡集とはみなされていないようだ。たとえば、James Porter, *The Traditional Music of Britain and Ireland* (Garland, 1989) なるイギリス伝承音楽 (= 民俗音楽) の詳しい書誌があるが、ここには他の一般向けイングランド民謡集は収録されているのに肝心の学術的なこの民謡集本体は項目になく、シャープの序文のみがイングランドとスコットランド低地地方の歌い手と歌との比較がなされているという理由で「文献」に含まれている (No. 865)。
73. Wilgus, *Anglo-American Folksong Scholarship*, p. 171.
74. Karpeles (*Folk Songs from Newfoundland*, p. 13) によると、1918 年アパラチア旅行のすぐあとに計画したが、資金不足で中止。1925 年に予定された計画は準備をしたが、1924 年 6 月にシャープの死で中断。カーピリーズはようやく独力で 1929-30 年に採集旅行をおこなうが、シャープほど採譜は上手にできないし、考えていたほど「(民謡の) 処女地」でもなかった、という。
75. William Goodell Frost, “Our Contemporary Ancestors in the Southern Mountains” (1889), reprinted in McNeil, *Appalachian Images*, pp. 91-106.
76. Cf. Becker, *Selling Tradition* (特に pp. 60-61), および Whisnant, Shapiro などを参照。